

週刊プレイボーイ連載

「追及！耐震偽装事件の真実」第1回
これが、大山鳴動した耐震偽装事件の
真相だ！

ルポライター・明石昇二郎

&ルポルタージュ研究所

『週刊プレイボーイ』2011年3月28
日号)

「耐震偽装」事件を
覚えていますか

今から5年ほど前、2005年11
月に発覚した「耐震偽装マンション・
ホテル」事件――。いったいどんな事
件で、そしてその結末がどうなったか、
ご存じだろうか？

正直に告白すれば、筆者は今回の記
事を書くことになるまで、この事件を
すっかり忘れていた。「よく知らないう
え、興味もなかった」と言ったほうが
正確かもしれない。

それでも、テレビ・新聞・雑誌、果
ては国会の場にまで登場し、責任の擦
り合いを繰り返していた「疑惑の主人
公」たちのことは鮮明に覚えている。

感情を表に出さずに訥々と話し、そ
の髪型から「かつら疑惑」も浮上して
いた**姉齒秀次**・一級建築士。彼は国会

での証人喚問の際、

「木村建設の篠塚氏から鉄筋の量を減
らすよう相当のプレッシャーをかけら
れました」

「私ひとりではできないのではない」
と証言し、関係者と共謀のうえ耐震
偽装は行なわれた――と話していた。

姉齒氏に「プレッシャーをかけてい
た」と名指しされ、さらには約200万
円のリベートを渡した相手とされた**篠
塚明**・木村建設元東京支店長は、広い
おでこが印象的だった。

「偽装には一切関与していない」

と反論したものの、リベートが事実
だったことが痛手となり、「姉齒氏の共
犯者」ではないかと疑われた。

そして、この事件が世間に広く知ら
れるきっかけを作ったのが、民間の建
築確認検査機関・イーホームズの**藤田
東吾**社長である。

「巧妙な偽装を当社が見抜いたことを
評価してほしい」

と胸を張りつつ、マンション販売会
社の社長から事件の公表を控えるよう
圧力がかかったのを拒否して、正義感
から事件を公表したと、お役人みたい
な面持ちで主張。国会での参考人招致
の時は、

「もし偽装が意図的・人為的に行なわ
れるのであれば、一番利益を得るのは
デベロッパー（開発業者）だろう」

と、「耐震偽装」の主犯をヒューザー
と想定し、イーホームズで調査してい
たことを明らかにした。

その結果、疑惑の目が一斉に向けら
れることになったのが、マンション販
売会社・ヒューザーの**小嶋進**社長だ。

当時、世間の注目を集めていたホリエ
モンこと堀江貴文氏に**準え**、自らを
「オジャマモン」と呼んでほしいと軽

口を叩き、世間の反感を買っていた。

テレビで生中継された国会での参考
人招致の際には、イーホームズ藤田社
長の証言に対し、

「何言っているんだよっ！」
「ふざけんじゃないよ！」

と、甲高い声で叱り飛ばし、さらな
る反感を一身に集める。

耐震偽装をした姉齒氏やそれを見逃
した藤田氏に対する怒りのためか、マ
スキミに登場する時の彼の顔は常に目

つきが鋭く、見るからに「悪人面^{づら}」をしていた。

このように、登場人物の面々はそれぞれ大変魅力的なキャラクターだったのである。

大山鳴動して鼠^{ねずみ}一匹？

ところで、当時語られていた「耐震偽装のシナリオ」(以下「偽装のシナリオ」)は、大筋でこんなものだった。

「マンション販売会社(＝小嶋氏)と建設会社(＝篠塚氏)、そして一級建築士(＝姉齒氏)らが結託し、建設コストを下げるため、地震の耐震強度データを改竄^{かいざん}。そうして建てた格安マンションを売りまくり、私腹を肥やしていたばかりか、その事実を隠蔽^{いんぺい}しようとして政治家まで動かしていた――」

「疑惑の主人公」たちは、豪邸や高級住宅地のマンションに住んでいたり、高級外車や家用飛行機を乗り回していた。週刊誌からは「これが私腹を肥やしていた物的証拠」と報道され、警察の捜査も「偽装のシナリオ」に沿って進められた。「小嶋氏と関係あり」として名前の挙がった国会議員たちもまた、マスコミの格好の餌食^{えじき}となる。

当時の新聞記事にはこう書かれている。

『「どんな手を使ってもがけを上げる」。

偽装発覚直後の警視庁幹部の宣言通り、捜査本部は法令を駆使し、容疑事実を

あぶり出した」(『共同通信』06年4月26日配信記事)(傍点筆者。以下同)

『目標は詐欺容疑での立件。それがで

きなければ、世論の支持は得られない』

(中略)全国約120か所の捜索が行われた昨年12月、警察幹部は強い決意を見せていた(『読売新聞』06年4月27日付朝刊)

このように警察幹部たちは、別件逮捕であるが「とにかく捕まえること」を優先し、「真相の解明」はそれから行なえばいいと考えていたフシがある。

そんな警察や報道陣が考える事件の本丸は、「悪人面」したヒューザー・小嶋社長であることは明白だった。そして、マスコミや世間の期待に応えるべく、警察は「疑惑の主人公」たちを次々と逮捕していく。

クライマックスは、06年5月17日の小嶋社長逮捕である。彼にかけられた容疑は、警察幹部が予告していたとおりの「詐欺」だった。だが、事件はこれにて一件落着――とはならなかった。

*

大変異例なことに、この事件では警視庁などによる捜査が続行している最中から、捜査に検事が投入されている。果ては東京地検刑事部内に「専従捜査班」が設置され、さらに態勢が強化されていた。

『全容解明に向けた検察の強い姿勢の表れ』(検察幹部)(『共同通信』06年1月14日配信記事)

であり、捜査は検察主導で進められた。その捜査には500人も警察官が動員されたのだという。

にもかかわらず、本件の「耐震偽装詐欺」に絡んで裁かれたのは、一級建築士の姉齒氏のみだった。つまり、「奴らは皆、グルになって耐震偽装を働いたに決まっている」

と、私たちが報道を通じて信じ込まされてきた事件は、**姉齒建築士の単独犯行**だったのである。

この事実は06年9月、姉齒氏の初公判の場で明らかになった。つまり、

検察の描いていた「偽装のシナリオ」は、真っ赤なウソだったのだ。

姉齒氏は、建築士としての能力がないのにカネを稼ぐため偽装を繰り返して、偽装がバレてからはウソをついて、仕事をもらっていた建設会社に罪を擦りつけた――。これが、**大山鳴動した耐震偽装事件の真相**なのだ。ちなみに、姉齒氏は最高裁で懲役5年の実刑が確定し、現在、日本のどこかの刑務所で服役中である。

となると、あれほどまでに大騒ぎしていた一連の「報道」は、いったい何だったのか？ マスコミがさんさんぱら喧伝していた「偽装のシナリオ」は、先入観に引きずられた不十分な取材の結果による**思い込みか憶測**に過ぎず、つまりは**デタラメな誤報**だった。

筆者もまた、当時の新聞記事や雑誌記事を鵜呑みにし、事件を100%誤解していた一人である。そんな誤情報を読まされたうえ、誤解までさせられていた身からすれば、**こちらのほうがよっぽど「詐欺」ではないか**――と思う。世間を空騒ぎさせた警察と報道の罪は重い。

そればかりではない。罪をなすりつけられたうえに、別件逮捕までされた「疑惑の主人公」たちの名誉や人権はどうなるのか。彼らは、単なる憶測に過ぎなかったマスコミ報道により、これでもかというほどの社会的制裁を受けてしまっている。

報道が原因で自殺した人も：

姉齒氏との共謀を疑われた関係者の中には、報道による「社会的制裁」を苦にして自殺した人もいた。

ヒューザーのマンション「グランドステージ藤沢」（神奈川県藤沢市）の設計を請け負い、その耐震構造計算を姉齒氏に依頼していた設計事務所代表・

森田信秀氏は、事件発覚からほぼ1週間後に遺書を残して自殺していた（享年55歳）。その全文が掲載された『官僚とメディア』（魚住昭著、角川書店刊）より引用する（ゴチツクは筆者）。

「これだけは言っておきます。姉齒の計算書偽造はまったく知りませんでした。これはヒューザーの設計三社、木村建設も同じだと思います。こんなことを知っていて、隠すばかりどこにいますか。**報道により**世の中が姉齒の間と思っていることに耐えられなくなりました。日々、姉齒の不正に対する処理におわれ、対応が追いつかず、後手、後手にまわり、他の設計三社にも迷惑をかけそうです。先のことを考えるともう無理です」

警察の捜査がひと通り終了した頃の99年7月2日付『朝日新聞』朝刊はこの遺書に触れ、「この遺書が実は事件の全体像を示していた」

と報じている。そのとおりだ。ならばなぜ朝日新聞は、このダイニング・メッセージ（死の間際の言葉）を自ら検証せず、「組織犯罪」だとする「大本営発表」を垂れ流し続けたのか。検証していれば間違いなく大スクープになっていたことだろう。

そんな罪の意識からなのか、同新聞は、筆者がゴチツクにして強調した「報道により」という部分をわざわざ割愛し、一部の掲載にとどめていた。これでは、無実の人を報道が殺した――と、自ら認めているのと同じではないか。

*

事件に絡んで逮捕されたのは姉齒氏のほか、篠塚氏（建設業法違反）、藤田氏（虚偽登記）、小嶋氏（詐欺）ら8人だったが、姉齒氏以外はすべて別件逮捕だった。その後、本件で罪を問われ、再逮捕された人は一人もいない。別件逮捕を乱用した**警察と検察の大失態**以外の何ものでもないのである。

事件の首謀者と目された小嶋社長の「詐欺」容疑にしても「偽装をさせてマンションを売った」からではなく、耐震偽装の発覚後も「マンションを売っていた」から——というものだ。この容疑自体、耐震偽装の「小嶋首謀説」を完全に否定している。皮肉なことに、小嶋氏の逮捕は「偽装のシナリオ」の終焉しゆうえんを意味していたのだ。

それにしても……なぜ、こんなバカげたことが起きてしまったのか？ 筆者は事件の検証取材に着手した。だが、「バカとお上（と報道）には勝てない」とばかりに、関係者たちは一様に裁判で控訴せず、泣き寝入りをしていた。そんな中、一人だけ最高裁まで上告し、今なお闘っているのが、ヒューザーの元社長・小嶋進氏だ。

いったい小嶋氏は何に異議を唱え続けているのか——。筆者は小嶋氏への取材に成功した。そして取材を続けていくうち、これまでの報道ではまったく明らかになっていない「耐震偽装事件」の真相が浮かび上がってきたのである。（以下、次号に続く）

配信元・ルポルタージュ研究所

Copyright (C) 明石昇二郎

URL: <http://www.rupoken.jp/>